

# 海外ロングステイのススメ

小林 正弘

## はじめに

2004年3月に定年退職して6年目に入っている。退職後のことを真剣に考え始めたのは、最後の学校となった市内K中の荒れが収まり、一年学級担任になった01年の頃であった。退職前 私にはかすかな夢があった。東南アジアのどこかで、子どもたちを支援するボランティアの夢である。それを実現するために最低限の語学力が必要と考え、半年間、語学留学を決意し、家内の了解も得てあった。いよいよ退職が近づき、経費を第一にネットで探し、ニージーランドに決めた。気持ちを切らさないために。卒業生の進路を確定した後には年休を出し、3月30日出発と決めた。その後のお

よそ6年間の体験を紹介することによって、これから退職を迎える方々の参考になれば、こんなに嬉しいことはない。

## 一 海外志向のきっかけ

私は社会科教師である。海外への関心は若い頃からあったが、1981年〜84年のシンガポール日本人学校への赴任がそれを決定的なものとした。手作り教育がしたいというのが動機だったのだが、当時生徒は小中合わせて2000人もおり、かなわぬ夢だった。しかし、国内では学校の荒れが始まり、対外的には教科書問題が吹き荒れ、緊張した日々となった。個性豊かな生徒に囲まれ、勤務条件も国内に比べはるかに自

由があり、ゆとりもあつた。タイへの修学旅行でストリートチルドレンに出会つたことが退職後の夢につながつた。

## 二 ボランティア探し難し

留学を終え、家内を呼び寄せて、さあNZでしばらく滞在と思つたら、義母の急死で日本に引き戻された。親や町内などのしがらみは避けがたいが、それを気にしては何もできない。幸いなことに、私たちの両親は理解があつた。死に目に会えなくとも後悔はなかつた。私たちは割り切ることにしている。

さて、ボランティア先を探し始めたのだが、これが予想以上に苦戦した。日本のNGOやNPOは歴史が浅く、ボランティアのための資金を募る団体は多いけれども、スタッフを派遣するほどの力を持つている団体は少ないし、ネットワークも限られた範囲でしかない。私の場合は当初ベトナムを考えたのだが、見つけれなかった。仕方なく、とりあえずということでもタイのチェンマイにマンションの一角を借りてロングステイを始めた。そのマンションでたまたま出会つたオーストラリア人夫妻の紹介で孤児院に通つことになつた。

彼らはチェンマイに来た時にはいつもこうしているのだという。彼らにはYMCAという世界的なネットワークがあるのだ。何の気負いもなく、自然体で参加しているのがうらやましくもあつた。エイズで親を失つた赤ちゃんから就学前の子どもたちが100人余りいる孤児院だつた。タイ語などほとんどわからない私たちがだつたが、絵を描いたり、粘土遊びをしたりして遊ぶだけの毎日だつたのに、一ヶ月後にお別れする時には泣かれて困つた。

この滞在中に里子支援や学校建設を支援しているメコン基金というNGOのスタディーツアーに現地参加したのが機縁で翌年、ラオス国境に近い田舎の中等学校で日本語を教えることになつた。住宅だけを保障され、月9000円のお手当をいただいた。それでも毎日ビールを飲んで半月は暮せた。学校では英語科の職員室(アメリカ人、フィリピン人、タイ人)に配属され、みなさん親切で困ることなどなかった。村人にも声をかけられ、よくパーティーに誘われた。タイ東北部は日本語熱が盛んで、毎年のように教師が足りない状態である。私のほかにもう一人若い女性がいた。彼女は日本語教師の資格も持ち、意欲も十分なのに手

当は18000円で、生活には困らないけれど、往復のチケット代が出ない状態なので、親が反対しているということだった。同僚のアメリカ人は私たちの何倍もの手当を受け、常にアメリカから雑誌などの情報誌が届いていた。きちんとしたNGOでスポンサーは企業、だということだった。日本の若い世代にいくら意欲があっても現状ではさびしい限りである。

### 三 ロングステイの楽しさ

37年振りに教える側から教わる側に戻った語学学校の体験は忘れ得ぬ思い出となった。たった半年間で話せるようになどは期待もしなかったけれど、できるだけ日本語のない環境（ホームステイ）に身を置くことによって、必死になれた。分からない授業ということものはこんなにつらいことなのかと、退職後に生徒の気持ちかを再認識した。それ以上に楽しかったことは、世界中の若者（中、韓、アラビア、スイスやドイツなどの欧州諸国）と直に交流できたこと、ホームステイ先の家族を通してNZ人の労働観や生活ぶりを拝見できたことである。彼らは明らかに生活を楽しむために働いている。5時過ぎには確実に家に帰り、家事を分担し、

子育てにも参加する。一般のサラリーマンがポートを普通に持ち、休日になればセーリングや釣りに出かけ、安い料金でゴルフを楽しみ、クラシックカーの修理やドライブに精をだす。給料は2週ごとに手にし、老後の心配はないから、もらったお金はすべて使い切ると大方の人はいう。一体日本とどちらが先進国で豊かなのか。NZには通算1年ほど滞在したことになるが、自然の美しさ、それを守ろうという行政や人々の強い意志を感じた。反核が国策で、原発はなく、水力発電所でさえ自然との調和が考えられて設計される。守られるべき自然の周囲にはお店や宿泊施設の乱立も許さない。「農業は文化である」という標語通りの田園風景が全国各地に大切にされている。

タイのチェンマイで出会った人々の微笑みと親切も忘れ難い。白人の身体障害者が現地ヘルパーを頼んで生活している姿にも感動した。ハンディキャップを抱えても閉じこもることなく、人生を楽しむことができる社会、素晴らしいではないか。昨年から今年にかけてはベトナムに5カ月余り滞在した。ハノイにアパートを借りた。

当初は日系企業のベトナム人に日本語を教える話が

あり、その準備もしていたのに、不景氣の影響か話がいつの間にか立ち消えになった。そこで、ベトナム戦争の戦跡巡りを計画し、南ベトナムのメコンデルタまでをバスで往復する39泊40日の大旅行を敢行した。ベトナム戦争がアメリカ力による何の正義も名分もない犯罪的な戦いであつたかという事実をこの目でしっかりと確認できた。その間に出会つた素晴らしい若者たちとの思い出はともここでは紹介しきれない。

ただ、彼ら若者が日本を、日本人を羨望の眼で見つめ、自分たちはもつといい国をつくるのだという目の輝き、日本人が学ぶべき自主自立の精神の強烈さを感じた事だけ報告しておきたい。日本人の精神疾患が増えているとの話になつた時、若い女の子が「私たちには悩んでいる暇はありません」という言葉が忘れられない。

### おわりに

「ロングステイのススメ」を書く以上、最後に手続きのことや経費について触れて終わりにしたい。私たちは原則夫婦2人で出かける。海外保険に入り、住民票を抜き、国民健康保険は止めていく。住民税も払

う必要はない。タイで何度か病院にかかったがいつもキャッシュレスで1銭も払つたことはない。NZは物価が日本と同じで生活費はかかるが、タイ、ベトナムは年金で十分である。ベトナムなどあの大旅行費を入れても月12万円（もちろん2人で）で暮らしたことになる。私がタイ料理に弱いもので、自炊を中心に過ごした。ベトナムでもNZでも自炊のできる部屋を探すことが基本になる。ビザが問題だが時間はたっぷりあるわけなので、自分で手続きして取得することをお勧めする。手数料を節約できる。ノービザで行けるのは最大3カ月で、ベトナムなどは2週間だ。各国とも在日大使館のホームページに手続き方法が載っている。私はパソコンを持参する。今はタイ、ベトナムでもちゃんと接続できる。日本でサイトを探してお気に入りに入れていけば、旅先でホテルやレンタカーの予約、旅行情報などが簡単に入手できてとても便利である。

ご質問のある方は下記に連絡ください。

電話 025—260—6592

mail—ko333399@castocn.ne.jp

(こはやし) まさひろ・新潟市